

資料

臨地実習前後の看護学生の変化として文献で取り扱われていた内容について Contents of Nursing Student's Changes in Clinical Practice in the Literature

金 壽子*, 武本 亜紀

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科

Sooja Kim, Aki Takemoto

School of Nursing, Faculty of Health and Social Services, Kanagawa University of Human Services

抄 録

目的：看護師の役割や活動場所が多様化するなか、臨地実習前後の看護学生の変化として、現時点までの文献において、どのような内容が着目されているのかを明らかにし、今後の臨地実習充実に向けた教育支援のための示唆を得る。

方法：医学中央雑誌（WEB版Ver.5）及び最新看護索引WEBでキーワードを「看護学生」「臨床・臨地実習」「変化」、抄録有、原著、発行年制限なしで絞込みをし、更に実習名不明なもの、実習前後での学生の変化を取り扱っていないもの、重複文献を除いた304文献を分析対象とした。分析は文献の実習科目、文献数の年次推移、文献で取り扱っている学生の変化の内容と、その変化を捉えるために用いられたデータの収集方法について分類した。

結果：領域別では精神看護学実習を扱ったものが最も多く全体の32.9%を占めた。また、精神看護学実習は、ほぼ毎年研究報告がなされていた。文献で学生の変化として取り扱われていた内容は【対象者や看護に対する捉え方】【学生のストレスと対処能力】【対象者への接し方や関係性】【学生の自己の成長の自覚】【学生の実践力】の5つのカテゴリーに大別された。文献の中で学生の変化を捉えるために用いられていたデータ収集方法として、質問紙が67.4%、記録・レポートが14.8%であった。

結論：領域別では精神看護学領域の実習に関する文献が最も多くを占めていた。臨地実習充実に向けた教育支援の示唆として、対象者や看護に対する捉え方を学生がより現実的に理解するための教育支援の充実と、臨地実習において学生の自己成長を促しストレス耐性を高めるための教育支援の充実の必要性が示された。

キーワード：看護学生、変化、臨地実習

Key words：Nursing Student, Change, Clinical Practice

はじめに

「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」（文部

著者連絡先：*金 壽子

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科

E-mail：kim-h4s@kuhs.ac.jp

（受付 2019.9.18 / 受理 2020.1.15）

科学省，2017）のなかで、近年の看護系人材に対する国民の期待の高まりに応えるためには、臨地実習の充実が不可欠と述べられている。併せて、学生の現実認識を広げ、看護実践能力が修得されることが期待されることから、多様な場における臨地実習の在り方について検討することも必要であると述べられている。更に「看護基礎教育検討会報告書」（以下、看護基礎教育報告書とする）（厚生労働省，2019）

においても、入院期間の短縮化や、医療機器の発達等による在宅医療・外来医療の進展、地域包括ケアシステム構築の推進等、療養する人々の生活の場は自宅や介護施設、学校を含む教育機関など多様化しており、看護職にとって、看護サービスを提供するという役割が一層求められていると報告している。

一方、看護基礎教育報告書では、現代の学生は、住環境の変化や科学技術の進歩等により、これまでに比べ、人間関係の希薄化や生活体験の不足が進んでいることを指摘している。また、看護職に対してコミュニケーション能力の不足があるとの指摘もあり、看護基礎教育においても、コミュニケーション能力の向上のための教育の一層の強化が必要としている。

以上より、看護学生を取り巻く環境が変化する中、先行研究において、臨地実習前後の学生の変化として、どのような内容が着目されているのか明らかにし、今後の臨地実習充実に向けた教育支援のための示唆を得たいと考えた。

目的

今後看護師の役割や活動場所が多様化するなか、先行研究のなかで、臨地実習前後の学生の変化として、どのような内容が着目されているのかを明らかにし、今後の臨地実習充実に向けた教育支援のための示唆を得る。

研究方法

医学中央雑誌（WEB版Version5）を用いて、キーワード「看護学生/AL・TH」and「臨床・臨地実習/AL・TH」and「変化」で、絞り込み条件は「抄録有」「原著」「発行年の制限なし」として文献検索を行い（2019年5月18日）、704件が検出された。最新看護索引WEBを用いて、キーワード「看護学生」and「実習」and「変化」とし、絞り込み条件なく、発行年の制限なしで検索した（2019年5月18日）結果、433件が検出された。

上記の各々のデータベースの検出結果から、実習科目名が明確で学生の変化に着目した文献のみを採用し、臨地実習以外の講義や演習の内容が含まれて

いるものや、実習中の一時点の学生の変化に着目している場合や、実習前から実習終了後の学生の変化を取り扱っていない文献を除外した。その結果、医学中央雑誌では183文献であった。最新看護索引は157文献が該当し、重複している36文献を除いた304文献を本研究の分析対象とした。

分析方法として、医学中央雑誌ではタイトル、抄録、最新看護索引ではタイトル、抄録と文献分類内容を加味して、文献の対象となっている実習科目、発行年別の文献数の推移、臨地実習前後で看護学生の変化として取り扱っている内容、各文献において、学生の変化を捉えるために用いられたデータの収集方法について分類した。

結果

対象文献304件の領域別・年代別の文献数を表1に示す。

対象文献を看護学実習の領域別にみると、最も多かったのが精神看護学実習に関するもので100件（32.9%）、次に基礎看護学実習46件（15.1%）、小児看護学実習43件（14.1%）、老年看護学実習・高齢者看護学実習39件（12.8%）、成人看護学実習38件（12.5%）、母性看護学実習・助産学実習16件（5.3%）、緩和ケア病棟・ホスピス・ターミナルケア10件（3.3%）、地域看護学実習・公衆衛生学実習6件（2.0%）、在宅看護学実習4件（1.3%）、国際看護学実習1件（0.3%）、統合分野の実習1件（0.3%）であった。

表1にある通り、年代別の文献数をみると、対象文献は1987年から2019年5月までの中で文献数が10件を超えているのは、1995～1996年、2001年～2002年、2004年～2006年と2008～2018年であった。精神看護学実習においては、1990年と1997年以外、毎年研究報告がなされていた。

臨地実習前後での学生の変化として文献で取り扱われていた内容を表2に示す。304文献から322の内容が抽出され、5つのカテゴリーに大別された。以下、カテゴリー：【 】、サブカテゴリー：[]、及び抽出した内容を以下に示す。

文献で取り扱われていた内容として、最も多かったのは【対象者や看護に対する捉え方】（164件、

表1 臨地実習前後の学生の変化について取り扱っていた領域別および年代別文献数（n=304）

(n=304)

	精神看護学実習	基礎看護学実習	小児看護学実習	老年看護学実習・高齢者看護学実習	成人看護学実習	母性看護学実習・助産学実習	緩和ケア・ターミナルケア・ホスピス実習	地域看護学実習・公衆衛生学実習	在宅看護学実習	国際看護学実習	統合分野の実習	年別小計
1987	1			1								2
1988	2			1								3
1989	1	1		1								3
1990			1									1
1991	1	1	1									3
1992	1	1										2
1993	5	1	1	2								9
1994	4		2									6
1995	5		3	2								10
1996	2		5	1	2							10
1997			3	3	1	1						8
1998	3	1	1									5
1999	5	1	1	1								8
2000	2				1							3
2001	2	2	2	1	2	2						11
2002	6	1	1		1	1	1		1			12
2003	4				3	1						8
2004	3	2	2	1	2			1				11
2005	5	2	2		2							11
2006	4	3	1	2				1				11
2007	2	1		1		2						6
2008	6	4	1				1					12
2009	4		2	2	3							11
2010	5	2	3	2	2	1						15
2011	3	2	1	4	3			1				14
2012	3	1	1	6	1	2	2					16
2013	4			2	3		1		1			11
2014	1	4	1		2	1	4		1		1	15
2015	5	3	3		2	1	1	1		1		17
2016	4	5	2		1	2						14
2017	4	3		2	3	2		1				15
2018	2	4	3	4	4				1			18
2019*	1	1						1				3
領域別実習数	100	46	43	39	38	16	10	6	4	1	1	304
%	32.9%	15.1%	14.1%	12.8%	12.5%	5.3%	3.3%	2.0%	1.3%	0.3%	0.3%	100.0%

* 2019年5月現在までの文献数

53.9%) で、「対象者や看護に対するイメージ」と「対象に対する意識・認識・考え」で構成された。この「対象者や看護に対するイメージ」では、精神障がい者、高齢者、子ども等、対象者に対するイメージに関する内容と、在宅看護、緩和ケア等、対象者の看護に対するイメージの内容が文献では取り上げられていた。「対象に対する意識・認識・考え」では、学生の偏見と精神障がい者観、母性意識、死生観等

の変化が取り扱われていた。

【学生のストレスと対処能力】(55件、18.1%) では、学生の苦手傾向の変化や学生の関心事象の変化等の「学生の傾向や思い」や、看護学生のストレス対処能力や心理的・生理的ストレス等の「学生のストレス・ストレス対処」、学生の「実習に対する不安」、[学生のレジリエンス] で構成された。

【対象者への接し方や関係性】(40件13.2%) では、

表2 臨地実習前後の学生の変化として文献で取り扱っていた内容

(n=304 重複有)

カテゴリー	文献数 (%)	サブカテゴリー	文献数 (%)	具体例
対象者や看護に対する捉え方	164 (53.9)	対象者や看護に対するイメージの変化	96(31.6)	精神障がい者に対するイメージ、 高齢者のイメージ、子どものイメージ、 在宅看護のイメージ、緩和ケアのイメージ
		対象に対する意識・認識・考えの変化	68(22.4)	偏見と精神障がい者観、 母性意識、死生観の変化
学生のストレスと対処能力	55 (18.1)	学生の傾向や思いの変化	22(7.2)	学生の苦手傾向の変化 学生の関心事象の変化
		学生のストレス・ストレス対処の変化	15(4.9)	基礎看護学実習における看護学生のストレス対処能力 成人看護学臨地実習における心理的・生理的ストレス
		学生の实習に対する不安の変化	12(3.9)	精神看護学実習における学生の不安 成人看護学実習前後の学生の不安
		学生のレジリエンスの変化	6(2.0)	精神看護学実習前後に学生のレジリエンス
対象者への接し方や関係性	40 (13.2)	対象者とのコミュニケーションや人間関係の変化	22(7.2)	学生-患者間の対人距離の変化 重症心身障児と触れあいから生じる関係性の変化
		学生の態度・社会的スキルの変化	18(5.9)	高齢者に対する態度の変化 在宅看護実習における社会人基礎力
学生の自己の成長の自覚	39 (12.8)	学生の学び・自己成長感の変化	13(4.3)	助産学継続事例実習の学生の学び 精神看護臨地実習における学生の自己成長感
		学生の学習意欲の変化	10(3.3)	基礎看護学実習における学生の学習意欲の変化 術後せん妄に対する学生の学習意欲の変化
		学生の自尊感情・自己効力感の変化	8(2.6)	精神看護学実習前後の看護学生の自尊感情
		実習に対する自己の振り返りの変化	8(2.6)	基礎看護実習前後で自己評価の分析
学生の実践力	15 (4.9)	学生の看護実践能力の変化	7(2.3)	成人看護学実習における看護実践能力
		学生の行動・援助の変化	5(1.6)	基礎看護学実習における血圧測定技術習得の経時的変化
		対象者への健康支援	3(1.0)	成人看護実習における健康回復支援の学びの変化
		その他	9(3.0)	
合計	322			

学生－患者間の対人距離の変化や重症心身障がい児との触れ合いから生じる関係性の変化等の「対象者とのコミュニケーションや人間関係」と、高齢者に対する態度の変化や在宅看護学実習における社会人基礎力等の「学生の態度・社会的スキル」から構成された。

【学生の自己の成長の自覚】(39件12.8%)では、助産学継続事例実習の学生の学びや精神看護臨地実習における学生の自己成長感等の「学生の学び・自己成長感」や「学生の学習意欲の変化」、精神看護学実習前後の看護学生の自尊感情等の「学生の自尊感情・自己効力感」や「実習に対する自己の振り返り」で構成された。

【学生の実践力】(15件4.9%)では、実習での看護実践能力等の「学生の看護実践能力」や、技術習得の経時的変化等の「学生の行動・援助」、[対象者への健康支援]で構成されていた。

臨地実習前後の学生の変化を捉えるために文献で用いられたデータ収集方法について表3に示す。データ収集方法として「質問紙」は205件(67.4%)と最も多かった。

質問紙では、自作の質問紙を作成し、あるいは尺

度等を用いて学生の変化を捉えていた。先の5つのカテゴリー別に尺度等をみると、【対象者や看護に対する捉え方】ではイメージ等の変化を比較するためにセマンティック・ディファレンシャル法(SD法)等が用いられ、【学生のストレスと対処能力】については、精神健康度(GHQ-12)やSense of Coherence(SOC)、気分プロフィール検査、レジリエンス検査等が用いられていた。【対象者への接し方や関係性】では多次元共感性尺度、社会的スキル測定尺度Kiss-18等が、【学生の自己の成長の自覚】では自己効力感尺度、外傷後成長尺度(PTGI)等が、【学生の実践力】では看護実践能力等が用いられていた。

次に「記録・レポート」(45件14.8%)で、実習記録、プロセスレコード、実習レポート、評価表を用いて、遊びに対する認識の変化、障がい児に対する気持ちの変化、精神障がい者観、気遣い、看護観の変化、自己課題の変化等を捉えていた。「面接」(14件4.6%)では、半構造化面接を用いて、終末期ケアの捉え方の変化、学生の気づき、子どもに対する感情の変化、男子学生の母性看護学実習における性役割観の変化等を捉えていた。「客観的指標」(6件

表3 臨地実習前後の学生の変化を捉えるために文献で用いられたデータ収集方法

		(n=304重複有)	
データ収集方法	データ収集方法の具体例	文献数	%
質問紙	自作の質問紙	205	67.4%
	尺度等 【対象者や看護に対する捉え方】 セマンティック・ディファレンシャル法(SD法) 等 【学生のストレスと対処能力】 精神健康度(GHQ-12)、Sense of Coherence(SOC) 気分プロフィール検査、レジリエンス検査 等 【対象者への接し方や関係性】 多次元共感性尺度、社会的スキル測定尺度Kiss-18 等 【学生の自己の成長の自覚】 自己効力感尺度、外傷後成長尺度(PTGI) 等 【学生の実践力】 看護実践能力 等		
記録・レポート	実習記録、プロセスレコード、実習レポート、評価表	45	14.8%
面接	半構造化面接	14	4.6%
客観的指標	唾液アミラーゼ、唾液中コルチゾール	6	2.0%
観察	参加観察	3	1.0%
不明		41	13.5%
合計		314	

2.0%)では、唾液アミラーゼと唾液中コルチゾールを測定することで手術室実習での学生の感情とストレスや成人看護学臨地実習で学生の心理的・生理的ストレスの変化を捉えようとしていた。「観察」(3件1.0%)では、実習中の参加観察を通して、認知症高齢者への援助的関わりの変化を捉えていた。「不明」なものは41件(13.5%)であった。

考察

今回の結果を踏まえ、領域別実習からみた学生の変化として文献で取り扱われていた内容の特徴と、臨地実習充実に向けた教育支援の示唆及び今後の課題について、社会的な潮流を併せて、以下に考察する。

1. 領域別実習からみた臨地実習前後の学生の変化として文献で取り扱われていた内容の特徴

臨地実習前後の学生の変化について、取り上げた文献は、精神看護学領域の実習が全体の3割と最も多くを占めた。背景要因として、1996年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正により、「在宅看護論」と「精神看護学」が柱立てされている。また、2013年には精神障害者施策として精神保健福祉法が改正され、医療保護入院における入院手続等の見直しが行われた。よって、本研究結果として、精神看護学領域の実習が多くを占めた理由には、これらカリキュラム改正や法律改正が背景要因として関与している可能性がある。

更に、1987年からほぼ毎年研究報告がなされていたのも精神看護学領域での実習であった。折山

(2007) は、精神的な疾患は身体的疾患に比べ見えにくい病気であり、精神疾患患者の場合、健康な人が体験し得ないような世界を体験していることが多いだけに、精神障害を持つ患者の主観的世界を理解することはきわめて難しいと述べている。つまり、精神看護学領域の実習では、学生が精神疾患を持つ対象者の思いを理解しにくい状況があるが故に、長きに渡り学生の変化に着目している研究がなされているのではないかと推察される。

2. 臨地実習充実に向けた教育支援の示唆について

(1)対象者や看護に対する捉え方をより現実的に理解するための教育支援の充実

臨地実習で学生の変化として文献で着目されていた内容としてあげられた【対象者や看護に対する捉え方】【対象者への接し方や関係性】【学生の実践力】の3つのカテゴリーは、日常的に接することの少ない看護の対象者に対するイメージや捉え方、その対象者への看護としての関わりに関連する内容が示されていた。本結果から、臨地実習を効果的に展開するために、臨地実習での学生の変化を、質問紙や尺度、記録やレポート、面接等を駆使して、捉える試みがなされてきたことが明らかになった。一方、時代の潮流として、看護基礎教育報告書で指摘されている通り、現状の学生は人間関係の希薄化や生活体験の不足が進んでいる。よって、現状で展開されている臨地実習充実に向けた教育支援を継続しつつ、新たな教育支援の試みを行っていく必要があると考える。

その点で、臨床現場のイメージ化については新たな試みが始まっている。具体的にはバーチャルリアリティ（Virtual Reality：以下VR）システムの実験運用がある。旭川大学保健福祉学部ではVRで手術室や病棟、集中治療室などベッドマウントディスプレイを装着して、自らが動くことはできないが、360°を見回して体験できるような取り組みがなされている。また、静岡市立清水病院では認知症VRで職員が認知症患者の疑似体験できる体験会を開催している。加えて、看護基礎教育報告書によると、医療・介護分野においても、AI（Artificial Intelligence：人工知能）、IoT（Internet of Things：モノのインターネット）等の情報通信技

術（ICT）の導入が急速に進んでいることが指摘されている。看護教育の充実を図る上でも、上記のようなVRを活用した研究がなされ、積極的に看護教育の現場に取り入れていくことを検討していく必要がある。

(2)臨地実習において学生の自己成長を促しストレス耐性を高めるための教育支援の充実

正村ら（2013）は、若年の看護学生であれ、社会経験を経た看護学生であれ、実際に命に向き合う臨床現場で、実際の患者との関係を形成しながら実習を展開することは、相当なストレス状態になると述べている。また、看護基礎教育報告書では、看護学生の背景及び活動場所が更に多様化するなか、いかに学生自身の社会性と感情・ストレス耐性を高めていくかが今後の課題になると指摘している。

今回の結果で示された【学生の自己の成長の自覚】と【学生のストレスと対処能力】の2つのカテゴリーから、現状において、臨地実習というストレスの高い環境下で、学生が自己の成長を自覚できるよう、或いはストレスやストレスへの対処能力に着目して学生の変化を捉えていることが示された。臨地実習は学生にとって常にストレスが伴う場であるため、現状の教育支援を継続しつつ、新たな教育支援方法を検討していくことが必要である。

その点で、学生のストレスと対処能力について、勝倉ら（2009）はマインドフルネストレーニングとして坐禅訓練を大学生に行い、大学生の抑うつ傾向と反すう的思考スタイルが減弱したと報告している。また、伊藤ら（2018）はマインドフルネスについて、医療現場で有用であり、エビデンスとその効果を紹介している。これは看護学生に限ったことではなく、教員側にとっても必要であり、臨地実習の場面で学生に提供できるように、教員自身がマインドフルネストレーニングを習得するための教育支援体制の検討も今後必要であると考えられる。

3. 臨地実習で学生の変化を捉えていく上での今後の課題

今回の結果から、学生の変化として文献で取り扱われていた内容として、5つのカテゴリーが示され、かつ臨地実習前後の学生の変化を捉えるためのデー

タ収集方法として、質問紙や記録、面接を駆使して情報を集めている現状が明らかになった。その一方で、臨地実習で最も本質的な学生の変化を捉えるための方略について言及している文献は、今回は見当たらなかった。時代の潮流として、多様な場における臨地実習の在り方が求められるなか、今後は看護領域だけではなく、一般社会の多様な対象者に活用されている理論を活用しつつ、臨地実習充実に向けた教育支援の示唆を得ていくことも必要になるのではないかと考える。例えば、クリステンセン（2018）のジョブ理論などは、ビジネス領域の理論ではあるが、顧客の本質的に片づけなければならないジョブをどのように明確にしていくのか、その方法を示しており、看護学生の臨地実習においても応用可能な理論であると考えられる。このような理論を積極的に看護の臨地実習の教育現場に取り入れていくことも今後検討していく必要がある。

結論

1. 臨地実習前後での看護学生の変化として、文献で取り扱われていた内容は、領域別では精神看護学実習を扱ったものが最も多く全体の32.9%を占めた。また、精神看護学実習は、ほぼ毎年研究報告がなされていた。
2. 文献で学生の変化として取り扱われていた内容は【対象者や看護に対する捉え方】【学生のストレスと対処能力】【対象者への接し方や関係性】【学生の自己の成長の自覚】【学生の実践力】の5つのカテゴリーに大別された。
3. 文献の中で学生の変化を捉えるために用いられていたデータ収集方法として、質問紙が67.4%、記録・レポートが14.8%であった。
4. 臨地実習充実に向けた教育支援の示唆として、対象者や看護に対する捉え方を学生がより現実的に理解するための教育支援の充実、臨地実習において学生の自己成長を促しストレス耐性を高めるための教育支援の充実の必要性が示された。

引用・参考文献

- Clayton M. Christensen. (2017). *ジョブ理論*. (依田光江訳). 東京：ハーバーコリンズ・ジャパン. (原著2016)
- 伊藤絵美, 藤澤大介, 「マインドフルネス なぜ医療現場で有用なのか、エビデンスとその効果『週刊医学会新聞』第3258号, 2018年1月29日1面.
- 勝倉りえ, 伊藤義徳, 根建金男, 金築優. (2009). マインドフルネストレーニングが大学生の抑うつ傾向に及ぼす効果：メタ認知的気づきによる媒介効果の検討, *行動療法研究*, 35(1), 41-52.
- 厚生労働省. (2019). 看護基礎教育検討会報告書. <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2019年12月9日閲覧)
- 共同通信, 「VRで看護現場体験」, 『室蘭民報』, 2019年10月24日朝刊
- 栗原広樹, 「認知症VRで疑似体験」, 『静岡新聞』 2019年8月10日朝刊
- 文部科学省. (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム ～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会報告書. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf (2019年12月9日閲覧)
- 正村啓子, 岩本美江子, 市原清志, 東玲子, 藤澤怜子. (2003). 臨床実習中の看護学生のストレス認知とそれを規定する常生活関連要因の検討. *山口医科大学誌*, 52 (1, 2), 13-21.
- 折山早苗. (2007). 精神看護学実習における「学び」の内容分析と看護過程の有効性. *日本看護研究学会雑誌*, 30 (1), 137-144.

